

「第78回 正倉院展」開催概要

The 78th Annual Exhibition of Shōsō-in Treasures

2026年10月24日（土）～11月9日（月）

奈良国立博物館 東西新館（奈良市登大路町50番地 奈良公園内）

奈良国立博物館（所在地：奈良市/館長：井上 洋一）は、「第78回 正倉院展」を、2026年10月24日（土）～11月9日（月）の会期で開催いたします。概要は以下の通りです。

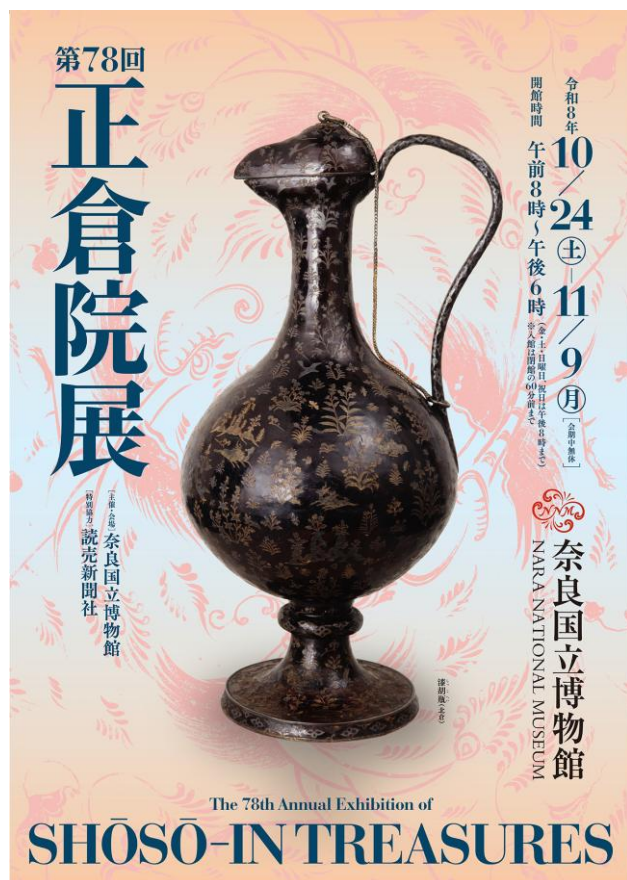
展覧内容

古都・奈良の秋の風物詩、正倉院展。およそ1300年もの時を超えて守り伝えられた珠玉の宝物に出会えるこの展覧会は、今年、第1回展が開催された昭和21年から80年を迎えます（過去3度は東京で開催）。

正倉院宝物は、奈良時代に日本を治めた聖武天皇のご遺愛品を中心に、当時一級の工芸品から、人々の暮らしを物語る文書まで、多彩な内容の品々を擁する宝物群です。その数は実に9000件にもものぼり、宝庫の開扉に天皇の許可を要する「勅封」等の制度のもと厳重に管理され、継承されてきた、世界でも他に類を見ない遺産です。

今年の正倉院展も選りすぐりの宝物が会場を彩り、ありし日の平城の都の記憶を鮮やかによみがえらせます。「紅牙撥しょうそういんほうもつ鏝しやうむてんのう基子」・「紺牙撥鏝基子」（北倉25）をはじめとした聖武天皇のご遺愛品の数々は、天皇の身边に置かれる品にふさわしく、洗練された美意識が光ります。中でも「漆胡瓶」（北倉43）は、西方のペルシアに由来する水差しを東アジアの漆工の技術を用いて作った、当時の東西交流の象徴的存在としても注目されます。洗練された造形美を示す「白瑠璃瓶」（中倉69）、西方起源の葡萄唐草文を精緻に鋳出した「鳥獣花背方鏡」（南倉70）とともに、国際色ゆたかな世界を演出します。一方、格調高い書風を示す「梵網経」（中倉34）や、躍動的な文様が不思議な魅力を放つ「密陀彩絵箱」（中倉143）といった品々は、敬虔で力強い当時の人々の祈りの心を伝えます。また、近年、宮内庁正倉院事務所が技法や素材の調査を実施した古代の蘭筵の関連品もお目見えします。

平城京の時代を生きた人々の息づかいを感じていただける今年の正倉院展に、どうぞご期待ください。



《報道関係者お問い合わせ先》

「第78回 正倉院展」広報事務局（TMオフィス内） 担当：馬場・永井・西坂

MOBILE：090-6065-0063（馬場） 090-5667-3041（永井）

TEL：050-1807-2919 FAX：050-1722-9032 EMAIL：shosoin-ten@tm-office.co.jp

主な出陳宝物の解説

※単位は、寸法＝センチメートル、重量＝グラム

※写真提供＝宮内庁正倉院事務所

〔出陳番号 7〕

北倉43

しっこ へい

漆胡瓶 1口（ペルシア風の水差し）

前回出陳年：令和元年（2019）東京国立博物館、平成28年（2016）

高41.3 胴径18.9

西アジアに由来する把手付きの水差しを胡瓶^{とって}という。本作は黒漆地^{くろうるしじ}に草花のほか、シカやオシドリ、山岳など種々の文様の形に切った銀の薄板を貼り、華やかに装飾されている。この銀板の文様には唐代に流行した技法が用いられているため、本品は唐からの舶載品である可能性が高い。エックス線撮影により本体は木の薄板を巻き上げ、もしくは輪積みしたうえで漆を塗っていることが判明している。『国家珍宝帳』^{こっかちんぼうちよう}に記載されており、聖武天皇のご遺愛品^{しょうむてんのう}と考えられる。



〔出陳番号 9〕

北倉25

こう げ ばちるのき し

紅牙撥鏤碁子 10枚（染め象牙の碁石）

前回出陳年：令和元年（2019）東京国立博物館、平成17年（2005）

径1.5～1.7 厚0.7～0.8

はなくいどり ぞうげ ご いし ばちる
花喰鳥を表した象牙製の碁石。撥鏤とは象牙を染めた後、表面を彫ることで白い地を出して文様を表す技法。本品は成形した象牙を赤色に染め、ヤツガシラとみられる鳥文を彫り出し、文様の一部に緑色と黄色をさして彩りを添えた可憐な逸品。現在、正倉院には、紅牙撥鏤碁子132枚、紺牙撥鏤碁子^{こんげ ばちるのき し}120枚が伝わっており、本展では紺牙撥鏤碁子も10枚が展示される。聖武天皇^{しょうむてんのう}の四十九日に際して東大寺大仏に献納された宝物であることが『国家珍宝帳』^{こっかちんぼうちよう}に記載される。



[出陳番号17]

南倉70

ちょうじゅうか はいのほうきょう

鳥獸花背方鏡 1面（靈獸と葡萄文様の鏡）

前回出陳年：平成26年（2014）

辺長17.1 縁厚1.6 重1934.1

はくどうちゅうぞうせい

かいじゅうぶどうきょう

白銅鑄造製の方形鏡。海獸葡萄鏡と呼ばれるもので、方形のものは極めて珍しい。生命感溢れる文様構成や優れた鑄上がりから、正倉院に伝わる白銅鏡のなかでも白眉とされる。文様は獅子形の鈕（つまみ）を中心にして六頭の俊貌（獅子に似た靈獸）を配し、その外側の区画に鳥・蝶・蜂などを、鳥獸の間には流麗な曲線を描く葡萄唐草を表し、外縁帯には忍冬唐草文を時計回りにめぐらす。本品は蛍光エックス線分析により、唐からの舶載品であることが明らかとなっている。



[出陳番号18]

中倉34

ぼんもうきょう

梵網經 1巻（戒律について説いた經卷）

前回出陳年：平成26年（2014）

本紙縦21.0 全長1413.9 軸長24.5

僧侶が守るべき決まり（戒）を説いた經典で、經文を格調高い筆致で記す。その書風は一般的な写經生と異なり、書の名手によるものと見られる。日本では鑑真和上の来朝後に梵網經の書写が多く行われており、この教えに基づき、聖武天皇も大乘菩薩戒を受戒された。巻頭には紫の紙に金銀泥によって花文や山水が描かれており、奈良時代の表紙・見返し絵として極めて貴重である。また当初より一具とみられる檜金銀絵經筒（中倉34）[出陳番号19] も伝えられている。



〔出陳番号26〕

南倉 1

ぎ がくめん すい こ おう

伎楽面 酔胡王 1口（楽舞用の面）

前回出陳年：昭和39年（1964）

縦39.2 横18.8 奥行24.9

くだら

伎楽とは朝鮮半島の百濟より伝えられた仮面劇で、飛鳥から奈良時代の寺院において盛んに演じられた。本品は酒に酔った胡国（ペルシアに代表される西アジアや中央アジアの国々）の王を表した面で、従者を従えて宴会をするという演目であったという。目が大きく鼻の高い面相や丈の高い冠帽は、西方の風俗をイメージしたものである。比較的軽い木材であるキリによって作られており、全体に貝殻胡粉による白色を基調とした彩色が施されている。



〔出陳番号29〕

中倉143

みつださいえのはこ

密陀彩絵箱 1合（鳥獣文様の献物箱）

けんもつぱこ

前回出陳年：平成24年（2012）

縦30.0 横45.0 高21.4

しょうきやく

くろうるしぬ

床脚という脚部が付いた箱。黒漆塗りの地に白や橙色によって鳳凰や怪鳥、唐草文が躍動的に表現されている。これは顔料の上から密陀僧（一酸化鉛）を混ぜた油を塗ったもので密陀絵と呼ばれる。これらの文様表現は高句麗古墳壁画や法隆寺の玉虫厨子など、7世紀の美術作品に通じる古様さを見せる。蓋表に貼り紙があり、天平勝宝4年（752）に行われた東大寺の大仏開眼会において、香を献納する際に使われたことがわかる。



〔出陳番号33〕

南倉156

こんどうのばん

金銅幡

りゅう

1 旒（金銅製の旗）

前回出陳年：平成7年（1995）

長170 身幅15.5

装飾性豊かな金銅製の幡。幡は本来織物製で、仏前を美しく荘厳するために仏堂内の柱などに懸けて用いる。本品は銅板を透彫りして鍍金し、さらに表裏に線刻を施しており、文様は花唐草や亀甲文、含綬鳥など多様なモチーフを表す。幡頭の左右や文様の隙間などには鈴や葉形の垂飾がつき、風で揺らぐと鈴の音が美しく響いたことであろう。正倉院には同様の幡がほかに三旒伝わり、一具として用いられたと考えられる。



〔出陳番号42〕

南倉174

こうりゅう

虹龍

1 点（二ホンテンのミイラ）

前回出陳年：平成20年（2008）

長23.0

えいきょう あしががよしのり らんじゃたい りゅうのひぼし
永享元年（1429）に將軍の足利義教が蘭奢待を切り取った際に「竜日干」を見たとの記録が残っており、この龍がいるために正倉院の扉を開く時には雨が降るといふ。本品はこれに該当すると見られる動物のミイラである。体型や指の数、歯の特徴といった観察を踏まえた近年の研究により二ホンテンと判明し、雌の可能性が高いという。明らかな人為加工痕は認められず、宝庫に侵入した後に自然乾燥したのか、こうしたミイラを龍に見立てて納入したのかは不明。正倉院の神秘性を示す異色の宝物。



〔出陳番号50〕

南倉151

いむしろ
藁筵 1帖（イグサ製の敷物）

前回出陳年：昭和43年（1968）

長261 幅29

イグサを織って作られた敷物。たていと経糸には麻糸が用いられている。あらかじめより幅広に作られた筵を細く裁断したもので、イグサを途中で継いで織る「中継ぎ」技法の痕跡が裏面に見られる。周囲には補強と装飾を兼ねて緑色の絹で縁が付き、裏面には同裂の紐が付くが、本来の具体的な用途は不明である。正倉院事務所では令和6年度に筵類の特別調査を行っており、古代の筵の素材や技法、用途などについて様々な事実が明らかになった。



〔出陳番号60〕

中倉69

はくる りのへい
白瑠璃瓶 1口（ガラスの水差し）

前回出陳年：平成26年（2014）

胴径14.0 高27.2 重634

淡い緑色を交えた透明なガラスが爽やかな印象を与える水差し。重心が低く曲線の美しい胴体や引き締まった首もと、水切れの良さそうな注ぎ口など、優れた機能美が示されている。アルカリ石灰ガラスをちゅうぶ宙吹きによって造形したもので、胴体に付けられたとって把手には軽やかな伸びがみられ、高度な技術を示している。こうした下膨れの胴に把手を備えた水差しは西アジアに由来するもので、本品も中近東圏の工房で製作されたものと考えられている。一点のヒビもくもりもない保存状態は正倉院伝来ならでは。



開催概要

展覧会名：第78回 正倉院展

会 期：2026年10月24日（土）～11月9日（月） ※会期中無休

会 場：奈良国立博物館 東西新館

所在地 〒630-8213 奈良県奈良市登大路町50番地

開館時間：8:00～18:00

※金・土・日曜日、祝日は20:00まで

※入館は閉館の60分前まで

出陳件数：出陳宝物 60件（北倉13件、中倉22件、南倉22件、聖語蔵3件）

うち11件は初出陳 ※宝物一覧は別紙

主 催：奈良国立博物館

特別協力：読売新聞社

協 賛：岩谷産業、印傳屋上原勇七、N T T西日本、関西電気保安協会、近畿日本鉄道、J R東海、
J R西日本、ダイキン工業、ダイセル、大和ハウス工業、中西金属工業、丸一鋼管、
大和農園、ロート製薬

特別支援：DMG森精機

協 力：NHK奈良放送局、奈良交通、奈良テレビ放送、仏教美術協会、読売テレビ

観覧券情報：日時指定券を販売予定です。詳細は8月下旬にリリースいたします。

奈良国立博物館問い合わせ：050-5542-8600（ハローダイヤル）

奈良国立博物館ウェブサイト：<https://www.narahaku.go.jp/>

正倉院展ホームページ：<https://shosoin-ten.jp/>

交通案内：近鉄奈良駅下車 徒歩約15分。

またはJR奈良・近鉄奈良駅から市内循環バス外回り「氷室神社・国立博物館」下車すぐ。

《報道関係者お問い合わせ先》

「第78回 正倉院展」広報事務局（TMオフィス内）担当：馬場・永井・西坂

MOBILE：090-6065-0063（馬場） 090-5667-3041（永井）

TEL：050-1807-2919 FAX：050-1722-9032 EMAIL：shosoin-ten@tm-office.co.jp